S2-2

遷延性意識障害例における聴性言語刺激による誘発磁界

広南病院　東北療護センター[1]、米国国立精神健康研究所　神経心理学研究室[2]
○中里　信和[1]、菅野　彰剛[1]、丹治　和世[2]、長嶺　義秀[1]、藤原　悟[1]

【目的】われわれは健常人において聴性言語記憶課題を用いた誘発磁界を計測し，刺激開始後250～1250ミリ秒付近の後期成分の振幅が，右半球より左半球で大きいことを見いだした。言語優位半球が右と確定したてんかん症例では，右側で大きい反応が出現することも確認されたので，本検査は言語優位半球同定に有用と考えている。遷延性意識障害患者では記憶課題が困難だが，受動的聴取による反応の半球較差の有無を今回検討した。【方法】対象は，当院入院中の重症頭部外傷後遷延性意識障害患者で，トーンバースト刺激聴覚誘発磁界で両側性の反応が確認された13（男9）例である。40種の抽象名詞単語を600ミリ秒で読み上げた刺激を両耳からエアチューブを介しランダムに繰り返し与え，刺激前0.5秒から後2秒までの誘発磁界をヘルメット型脳磁計で計測し100回の平均加算を行った。【結果】13例中，後期成分が確認できなかったのは6例であり，意識障害に関する広南スコア（最重症70点）は10から65（平均49.4）点であった。後期成分を認めたが言語優位側を判定できなかったのは5例で，広南スコアは17から30（平均21.0）点であった。また言語刺激において左半球に強い後期成分を認めたのは2例で，広南スコアは28点と62点であった。【考察】高度意識障害例では聴覚刺激に対する注意の低下や体動などのアーチファクトの影響で，後期成分の評価が難しいと考えられる。しかし，ごく限られた症例数ではあるものの，意識障害の程度にかかわらず，聴性言語刺激に対する反応の存在を客観的に証明できる可能性も示されたと考える。